

## 戦争を〈読む〉

文学部文学科日本文学専修教授 石川 巧

2015年はアジア・太平洋戦争の敗戦から70年の節目ということで、様々なメディアが戦争に関する特集を企画し、その記憶を継承していくための取り組みを行った。このような時期に全学カリキュラムの「表象文化」を担当することになった私は、せっかくの機会と思い、自身が編集した『戦争を〈読む〉』というテキストを使って映像作品と文学テキストを交錯させる講義を行うことにした。

シラバスの授業目的には、「文学テキストや映像表現の分析を通して、そこに描かれる人間、および社会・風俗・文化の諸相を考察する能力を鍛える。」と記し、具体的なテーマに沿ったテキストを読む方針であることを示した。また、筆記試験などは行わず、授業内容を踏まえて意見や感想をまとめる毎回のリアクション・ペーパーと学期末に提出するレポートを総合評価することにした。

授業では、実際の戦争記録や証言ではなく、言語や映像として表象された世界を読み解くことに重点を置くことにした。その時代を生きた人々が何を考え、どのように生き死んでいったのかを、いま現在を生きる私たちの問題として捉えることを狙いとした。敗戦から70年を迎え、すでに当時を語るができる体験者が数少なくなっているいま、私たちに求められているのは、貴重な証言に耳を傾けることであると同時に、そのとき何が起っていたのかを知るための主体的な取り組みをすることである。様々な記録をもとに考えを巡らせ、遠くにあるもの、自分とは関わりがないようにみえる世界に想像力を働かせることである。授業ではその点を繰り返し説こうと考えた。注意事項として、「授業中に私語をしている学生は退出していただく」こと、「正当な事情がある場合、事前に「欠席届」が提出されていれば、当該授業に関しては欠席としてカウントしない」ことを表明するとともに、最初の授業の際、「学が意欲のない学生は受講しないでほしい」と伝えた。おかげで半期にわたる講義はほとんど私語もなく、静謐な空間のなかで講義をすることができたように思う。

実際の講義では、第一回にオリエンテーションを行い、魯迅の「賢人と愚者と奴隷」という短編作品を例に、〈戦争〉の構造を簡潔に説明した。自分の家には窓がないと嘆く奴隷のところに押しかけて、お前のために「窓をあけてやる」と言いながらボコ家を壊す愚者。主人に向かって愚者を追い返したことを得意げに報告する奴隷。奴隷を「よくやった」と褒めてやりながら、いままで通りの高い家賃を取り立てる主人。そして、彼らの騒動をニコニコしながら眺めているだけの賢者。

この寓話には〈戦争〉の本質が的確に捉えられている。私たちが見極めなければなら

ないのは、奴隷と愚者が〈戦争〉をしている背後で利益をあげる主人の存在であり、自分は暴力や搾取に手を染めることなく安全な場所から事の成り行きを見守る賢人の存在なのである。授業の準備段階では、この寓話を学生がどの程度理解してくれるか不安だったが、返ってきた反応の多くがこちらの狙いをしっかり受け止めてくれており、とても嬉しかった。各回のテーマは、

- (1) 兵士たちの戦争—傷痍軍人 (小川未明「汽車奇談」[村へ帰った傷兵])、従軍と軍隊生活 (大西巨人「神聖喜劇」、特攻 (島尾敏雄「湾内の入江で」)、引揚げ (松本清張「赤い籤」)、
- (2) 戦争の日常—銃後の生活 (佐多稲子「香に匂ふ」)、空襲 (吉行淳之介「焰の中」)、敗戦と占領 (小島信夫「アメリカン・スクール」)、沖縄 (池澤聡「ガード」)、
- (3) 記憶としての戦争—強制収容 (石原吉郎「ある〈共生〉の経験から」)、原爆 (林京子「空罐」)、従軍慰安婦 (古山高麗雄「セミの記憶」)、難民 (シリル・ネザマフィ「サラム」)

である。傷痍軍人、従軍と軍隊生活、特攻、銃後の生活などの回では、記録フィルムなどを使ってアジア・太平洋戦争の実態を理解させたいうえで、文学テキストに刻まれた大東亜共栄圏の思想、国家が大衆を煽動して戦争へと駆り立てていくためのプロパガンダ、徴兵の仕組み、軍隊生活、近代日本における東アジア侵略への欲望などを明らかにした。一方、沖縄、従軍慰安婦、難民といったテーマに関しては、いま現在を生きる自分たちの問題としてそれを引き受けていくことの必要性について説いた。〈戦争〉というものをステレオタイプな物語として性急に理解してしまうこと、出来事の悲惨さに怖気づいて目を逸らしてしまうこと、それぞれの危うさを回避し、答えの出ない問いを巡って自分のなかで問題編成をし続けていくことが肝心だと話した。

受講生のなかには、自分自身も徴兵によって軍隊生活を経験したことがある韓国からの留学生や、祖父母が日本の空爆を経験したという中国・重慶からの留学生もおり、文学テキストの分析というかたちで〈戦争〉を語る自分の言葉が彼らに届くかどうか心配なところもあったが、リアクション・ペーパーの内容から推察する限り、彼らもまた日本をよく知るためのツールとしてこの授業を活用してくれたようであった。事前にシラバスを提示している関係で、授業計画を動かすことは難しいのだが、可能であれば、そうした留学生たちに登壇してもらい、日本が外部からどのように眼差されているのか、過去の歴史がいまをどのように支配しているのかを知って欲しかった。そうした柔軟性のある授業展開ができなかったことが今後の課題だろう。

中仕切りとなる「沖縄」の回では、沖縄在住の小説家・崎山多美氏にゲスト・スピーカを依頼し、「戦争と沖縄文学」について一時間余りの講演をしていただいた。残り時間の質疑応答では、「多くの一般人が犠牲となった沖縄戦の記録や、いままさに政治的対立を生んでいる辺野古への基地移設問題などに接するたびに、自分たちはそれに対してど

のように関わっていくことができるのか分からなくなる……』といった切実な言葉も発せられ、教室全体で答えのない迷路に嵌り込んでいくような緊張感を共有できた。

〈戦争〉を巡る問いは、善／悪、加害者／被害者、肯定／否定といった単純な二元論で処理できるものではなく、深く考えれば考えるほど局面が複雑化していく。感傷的なヒューマニズム、強固な信仰やイデオロギー、そして短絡的な解決策は思考の墮落を招くだけである。私たちが対峙しなければならないのは、性急な答えを探してしまう自分を制御し、〈戦争〉を巡るひとつひとつの事象（及びそれぞれの事象の交錯）を学び直してやることだろう。過去に起こった出来事が何故いまを生きる私たちにとって問題なのかをじっくりと考えてみることだろう。そして、ジレンマに引き裂かれ、どうにも身動きできなくなるような息苦しさのなか、縋るような思いで他者の言説に耳を傾けてみることだろう。

〈戦争〉の描写は陰惨な場面が多く、学生たちには大きな精神的負荷がかかったと思われるが（実際、リアクション・ペーパーのなかには「この授業を聴くと昼食が食べられなくなる」という声もあった）、本授業では表象機能という観点から文学テキストや映像作品を分析することに主眼を置いたこともあり、多くの学生たちは、出来事の重さだけでなく表現の細部を読み解くことの重要性に気づいてくれたのではないだろうか。

こうして春季に開講した「表象文化」は無事に終了したが、授業が終わって五ヶ月あまり経ったある日、私の授業をきっかけに難民問題に関心をもつようになり、シリア内戦を描いたドキュメンタリー映画（『それでも僕は帰る～シリア若者たちが求め続けたふるさと～』監督：タラール・デルキ）の上演会・討論会を企画した山田一竹君（異文化コミュニケーション学部3年次生）という学生からメールをもらった。そこには、

「表象文化の最終レポートにて、『サラム』を取り上げ、ハザラ人難民について書きました。その後も依然、難民問題に興味を持って勉強しております。その中で、中東における難民流出を軸に、最も混乱を極めるシリア情勢を精査しておりましたところ、『それでも僕は帰る』というドキュメンタリー映画に出会いました。その圧倒的な内容、リアルに迫る映像、何より、自身と同世代の若者が命を顧みず故郷を守るために立ち上がる姿に、流れる涙を止める事が出来ませんでした。その日より、一人でも多くの人にこの作品を観て欲しい……。他人事とせずシリアに向き合ってもらいたい……。その一心で、本日まで準備や調整を進めて参りました。当日は拙いながら、私も、シリア難民や実務家とのインタビュー内容、及び、一学生としての意見を発表させていただきます」

と書かれていた。私の拙い授業が契機となって実際に活動を始める学生がいたことに励まされるとともに、学生の前でものを語ることの責任を改めて痛感した。

いま、巷ではグローバリズムの嵐が吹き荒れ、多くの大学が将来構想に〈国際化〉という言葉掲げている。「国際化を図っていくためには日本のことをよく知っておかな

ければならない」というもっともらしい表現も広くゆきわたっている。

しかし、私が考える〈国際化〉とは、国家や民族を単位としてものごとを判断しないこと、すなわち、日本人であることを自明化しないことである。私自身はたまたま日本に生まれ、日本人として暮らしているが、それは日本という国家と契約を結んでいるに過ぎないと思っている。実際に可能かどうかは別として、いつでも契約を解除できるようにしておきたいという思いはあるし、そうした思考をもって行動することが〈国際化〉だと思っている。

私が「戦争を〈読む〉」という授業を通して伝えようとしたことも、この問題と根を同じくしている。戦争は往々にして奴隷と愚者の喧嘩とならざるをえない。多くの人々は奴隷にも愚者にもならないためにどうしたらよいかを考える。だが、問題はその外側にもある。彼らを対立させることで利益をあげる主人も、自分を安全な場所に置いて傍観しているだけの賢者も、ある意味では〈戦争〉の当事者だからである。奴隷にも愚者にも主人にも賢者にもならず生きるにはどうしたらよいか？ それが私の問いかけなのだが、残念ながらその答えはまだ見つかっていない。

いしかわ たくみ

# Syllabus

## 授業の目標

## Course Objectives

文学テキストや映像表現の分析を通して、そこに描かれる人間、および社会・風俗・文化の諸相を考察する能力を鍛える。

## 授業の内容

## Course Contents

『戦争を〈読む〉』（ひつじ書房）をテキストとして、毎回、それぞれのテーマに沿った内容を講義するとともに、映像表現やゲストの証言などを通して、〈戦争〉と人々の暮らしを考える。2015年は、アジア・太平洋戦争の敗戦から70年を迎える節目でもある。当時を語るができる体験者が少なくなって、記憶の風化が叫ばれる時代だからこそ、戦後占領期を生きた人々が何を考え、どのように生きてきたのかを追跡する必要があると考える。

## 授業計画

## Course Schedule

1. オリエンテーション
2. 兵士たちの戦争 (1)
3. 兵士たちの戦争 (2)
4. 戦争の日常 (1)
5. 戦争の日常 (2)
6. 記憶としての戦争 (1)
7. 記憶としての戦争 (2)
8. 戦後占領期の日本 (1)
9. 戦後占領期の日本 (2)
10. 人びとの暮らしと「ヤミ市」(1)
11. 人びとの暮らしと「ヤミ市」(2)
12. 「ヤミ市」の表象 (1) 映画
13. 「ヤミ市」の表象 (2) 文学
14. まとめ—「ヤミ市」とは何であったのか？